

さらなる飛躍を期待する

平成9.5.1～11.4.30 所長 今本博健

京都大学防災研究所がめでたく創立50周年を迎えたことに、関係者の一人として大きな喜び感じるとともに、その発展に尽力された関係者に深く感謝したい。

太平洋戦争で荒廃した国土に台風や地震などが次々と襲いかかり、通弊した国民に大きな打撃をもたらしていた状況のなかで創設された防災研究所は、発足当初はわずか3部門という小さな構成であったが、続けざまに発生した各種の大規模災害の頻発と歩調を合わせるかのごとく多くの研究部門や附属施設が次々と充実され、全国でも有数の大研究所へと成長した。とくに平成8年5月の改組により当研究所が防災研究の中核的拠点に指定されまた全国共同利用研究所へと脱皮したことは、研究所のさらなる飛躍を予感させるものであり、所員の責務もますます大きくなると思われる。

私と防災研究所との関わりは学部学生のころ特別研究のために防災研究所の附属施設の一つである宇治川水理実験所で水理実験を行った昭和35年の夏にさかのぼる。当時の宇治川水理実験所では水系・土系・気象系の多くの研究室が活動しており、狭く古びた研究室は総勢100人をこす教官・職員・学生で超過密の状態であったが、文字通り昼夜を問わず研究に没頭する活気ある実験所であった。大学院博士課程を中退してしばらく工学部に勤務したのち大学紛争さなかの昭和44年3月に宇治川水理実験所に配置換えとなったが、その後の30年以上にわたりそこを職場として過ごした。宇治川水理実験所での初仕事は昭和44年9月に京都国際会議場で開催された国際水理学会会議の見学先としての受入れ準備であったが、昭和45年に宇治構内の防災研究所本館の竣工に伴う実験所からの8研究部門の移転後も実験所の運営・管理に従事し、平成10年11月には長年の懸案事項であった洛南道路建設に伴う実験棟の補償工事を竣工できたことは職責の一つが果せたと喜んでいる。

平成9年5月から2年間にわたり防災研究所長をつとめたが、全国的に新規事業がほとんど採用されない緊縮財政の時期であり、防災研究所でも地震予知と噴火予知関連などの継続事業のほかが不採択になったことはまことに残念であった。任期中にとくに留意したことは5大部門・5研究センターという新組織を所期の目的通りに機能させることと全国共同利用研究所としての実りある成果を挙げることであったが、残念ながらいろいろについても中途半端のまま終わったように思う。前者については、ごく一部を除いて研究室の再配置もままならず、新設の研究室には不便をかけたままであり、わずかに技術室の整備と談話室の新設が実現できたに過ぎなかった。後者については、とくに研究経費の制約により十分な共同研究活動がなされたとはいえないが、防災研究所が自然災害総合研究班の受け皿として活動する芽生えが見えたことは評価できると考えている。

所長として経験したことで印象に残ることは、文部省所轄並びに国立大学附置研究所長会議などを通じて他機関での研究状況をかいま見ることができたことのほか、学内では任期中に京都大学の部局長会議構成員の順番が防災研究所にまわってきたため評議会とはちがった雰囲気を感じたこと、宇治地区でも研究所長会議・懇談会などを通じて研究所間の理解と協力を進められたことなど、いまでも懐かしく思い出される。所内でも、海外からの研究者や学生を招いて談話室で定期的を開いた懇談会、研究所への海外からの訪問者から記念撮影のために欲しいとの要望にこたえて設置したセラミック陶版製の門標、所内公募作品から所員が投票で選んだものに専門家の修正を加えて定めた研究所のロゴマークなど、多くの楽しい経験をさせていただいた。無事に所長の任期を終えられたのは所

員の皆さまの協力のお陰であり、とくに事務部の職員の方々の協力には感謝している。また幸い任期中には所員に大きな事故がなかったものの、名誉教授の土屋義人先生および光田寧先生がお亡くなりになられたのは研究所としても大きな悲しみであった。

防災研究所は、平成8年5月の改組により、設置目的を「災害に関する学理及びその応用の研究」から「災害に関する学理の研究及び防災に関する総合研究」に変更し、それまでの災害を伴う自然現象の予知・予測と災害の防止・軽減のための構造的な対応法の研究といった理工学的な研究と、被災する側の人間及び社会の問題を人文・社会科学、計画科学、さらには危機管理までを含めた研究とを有機的に結びつけた総合的な研究の推進体制を整備しようとしたが、5年以上経過した現在においても改組の効果が十分に発揮されたとはいえない。むしろ理工学的な研究以外が加わることにより、研究所の性格があいまいになったきらいすらある。総合防災という概念は確かに重要であるが、防災研究所における研究は、他の防災機関での研究とは異なり、あくまで理工学的な研究を基盤としたところに特色をもつべきではないだろうか。

社会情勢のほかコンピュータや観測・計測機器の著しい発達により研究環境は大きく変化しつつあるが、創設期の先人が大事にした研究の独創性と愚直なまでに地道な観測・実験研究を忘れることなく、防災研究所がさらに大きく飛躍されることを期待している。